

富士に祈る Ⅱ

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 — 火祭り・その2 —

先回は、毎年八月二十六日と二十七日の二日間、にわたって行われる北口本宮富士浅間神社(以下「浅間神社」とする)が管掌する「鎮火祭」(以下、通称に従い「火祭り」とする。の二十六日の行事について記した。今回は二十七日の行事について記す。

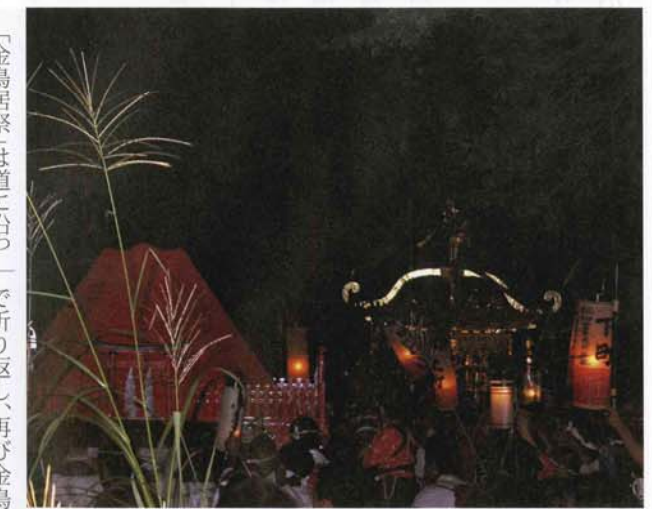
二十七日の主な行事は午後一時半からはじまる「御旅所発興祭」、午後三時半からの「金鳥居祭」、午後六時半からの「御鞍石祭」、午後七時からの「高天原祭」、そして、「諏訪神社還幸祭」、「本殿還幸祭」からなる。ちなみに、この日浅間神社に還幸する神輿に参拝者がススキの御幣をもって同道し、

境内の神域である「高天原」を神輿と共にめぐることが、「すすき祭り」と称して富士吉田市の観光協会が観光宣伝することになったのは昭和五十七年からのことである。ちなみに、「すすき祭り」に用いられるススキを取りに行くのも世話人の仕事である。二三日前から刈り取っておかれたススキを、平成十五年からは当日の早朝刈り取りに行くことになったという。そして、観光協会の人々が御幣を作り、ススキに結わえ、これを三百円で販売する。なお、御師宅では、講社の人々が幣紙を切り、ススキの御幣を手作りす

「御旅所」(コミュニティセンター)で行われる「御旅所発興祭」は、「修祓」「宮司一拝」「献饌」「宮司祝詞奏上」「宮司玉串拝礼」「参列者の玉串拝礼」「撤饌」とに則って行われ、神輿が御旅所を出発する。担ぎ出された神輿は、いずれも表通りを行きつ戻りつしながら次第に下宿の方へと下つていき、午後三時頃には金鳥居の前に一旦到着する。これを合図に、浅間神社の神職が「金鳥居祭」の準備に取り掛かる。一方、神輿は小休止の後、本通りを下吉田の境まで下り、再び金鳥居まで登ってきて、「金鳥居祭」が始まる。なお、両神輿は何度も小休止を繰り返しながら「巡幸」するが、小休止にあたっては、御山神輿を地面に三度落とす所作が行われる。およそ「頓(1)」「強」とも言われる御山神輿が地面を叩く音は地響きを伴って聞こえ、これが「地鎮」の意義を有していることは容易に理解される。

「金鳥居祭」は道に沿って前後に据えられた両神輿を忌竹で囲って行われる。祭典は「宮司一拝」「献饌」「宮司祝詞奏上」「宮司玉串拝礼」「参列者玉串拝礼」「撤饌」「宮司一拝」と続く。祭典終了後、両神輿が再び出発をする。この時、明神神輿は金鳥居交差点を東に折れて、中曽根地区のあたり

と、世話人が提燈による神輿の呼び立てを行い、両神輿は浅間神社の境内を指して、明神神輿、御山神輿の順に一気に境内へと進む。そして、境内に入った両神輿は「高天原」と呼ばれる神域を七度巡り、参列者はススキの御幣を掲げながらこれに従う。両神輿と参拝者が一体となって神域をめぐるとなると、熱気は高まる。午後七時ころには両神輿が「高天原」に安置され、「高天原祭」が行われる。ここでは、「宮司一拝」の後「祝詞奏上」のみが行われ、明神神輿、御山神輿の両神輿はそのまま諏訪神社へと担ぎ込まれる。そして、明神神輿、御山神輿から移された御神体はそれぞれ、浅間神社の御神体で還御する際、「御絹垣」で包まれた御神体が浅間神社の本殿に入るまでの間、周囲の一切の電灯が消され、写真を撮ることも許されない。



高天原をまわる両神輿

で折り返し、再び金鳥居交差点まで来ると、次に本通りを下吉田の境まで下つていく。そして、折り返して、三度金鳥居交差点まで来ると、富士山駅へと向かい、ここまで出張っていた御山神輿と合流し、四度金鳥居交差点まで折り返してから上宿方面へと本通りを登っていく。

こうした両神輿の動きは、いわゆる「巡幸」と呼ばれる所作であり、一年に一度、浅間神社の大神が地域を巡幸してまわることを意味している。また、上宿交差点へと向かう両神輿を西念寺の住職が読経しながら見送る「御登り」の儀が行われることも、二十七日の行事が前日からの神輿渡御と一連の行事であることを示している。「すすき祭り」の呼称が喧伝されることによる混乱があるが、御祭神の「渡御」「巡幸」そして「還御」と二日間の行事は一貫しているのである。

午後六時になると、上宿交差点にて小休止していた両神輿が担ぎ上げられ、いよいよ「御鞍石祭」が行われる。「御鞍石」へと向かう。しかし、そのまま「御鞍石」に向かうのではなく、明神神輿は上宿の交差点を基点に、国道一三八号線を行きつ戻りつして、「巡幸」を繰り返す。そして、いよいよ浅間神社協の下向道を登り、「御鞍石」へと向かう。「御鞍石」は諏訪明神の旧社地と伝えられ、馬の鞍の形をした巨石の上に明神神輿を載せて「御鞍石祭」が行われる。祭典は宮司による「献饌」「祝詞奏上」「玉串拝礼」が一連として行われる。特に祝詞には「御鞍石」が諏訪明神の旧御鎮座地であったことや、「御社」の起源ともなっていることが伝承として盛り込まれている。「御鞍石祭」が終わると、「上げ松」で宮司によって神謡が詠われる。「上げ松」は浅間神社境内の西方に立つ老松で、周囲を玉垣が囲んでいる。ここで「諏訪の宮、諏訪の宮、御影八葉神、左右神、げにも候」という神謡を三度繰り返すのである。当該の神謡の意味は判然としないが、諏訪明神をはじめ、浅間の大神、八葉の嶺の神々、そして隨身の神々と、諸々の神々を請来する問答のようにも聞こえる。「上げ松」の儀が終わると、世話人が提燈による神輿の呼び立てを行い、両神輿は浅間神社の境内を指して、明神神輿、御山神輿の順に一気に境内へと進む。そして、境内に入った両神輿は「高天原」と呼ばれる神域を七度巡り、参列者はススキの御幣を掲げながらこれに従う。両神輿と参拝者が一体となって神域をめぐるとなると、熱気は高まる。午後七時ころには両神輿が「高天原」に安置され、「高天原祭」が行われる。ここでは、「宮司一拝」の後「祝詞奏上」のみが行われ、明神神輿、御山神輿の両神輿はそのまま諏訪神社へと担ぎ込まれる。そして、明神神輿、御山神輿から移された御神体はそれぞれ、浅間神社の御神体で還御する際、「御絹垣」で包まれた御神体が浅間神社の本殿に入るまでの間、周囲の一切の電灯が消され、写真を撮ることも許されない。

「金鳥居祭」は道に沿って前後に据えられた両神輿を忌竹で囲って行われる。祭典は「宮司一拝」「献饌」「宮司祝詞奏上」「宮司玉串拝礼」「参列者玉串拝礼」「撤饌」「宮司一拝」と続く。祭典終了後、両神輿が再び出発をする。この時、明神神輿は金鳥居交差点を東に折れて、中曽根地区のあたり

42

句・菅谷秀文

絵・橋本豊治

出家決む四門出遊されし後

釈尊は文武いずれの能力も優れていたと伝えられ、また人生というものに対し、深く思い悩んでいたとも伝えられている。

東の城門から出ると、そこで力なく衰えた老人に出会う。老いることを免れることは出来ない。

南の城門から出ると、やつれて苦しんでいる病人に出会った。人は病から逃れることは出来ない。

西の城門から出ると、死者の葬列に出会った。死を免れることは出来ない。

北の城門から出ると、そこには清々しく輝く出家修行者の姿があった。その神々しさに打たれた釈尊は、出家をして人生の意義を見出そうと決心したのである。